

五 ショートランド島（西南台後期）

何とかなるだろうと樂觀した食料事情が、日を追って悪くなってきた。

食料の主たるものは、海岸地帯にある椰子の実と椰子の幹の芯芽であるが連日の収集で次第に少なくなってきた。特に椰子の幹の芯芽は、美味で、しかもかなりの大きさがあがるが、これ採取すると、何十年経ったその椰子の樹も枯れて棒となり、再び食料源にはならない。

ジャングルの其処此処に僅かに植えた甘蔗は、日が当たらないので、葉だけが茂り、芋の成長は極めて遅い。

大隊本部四十五名の食糧を安定的に得る為には、もっと広い農園を開発する必要があった。

しかし、中隊と比べて作業兵員の少ない本部には困難な事に思われた。と云って各中隊も棄ては無い筈であり、中隊に依存するなど許される事ではなかった。

改めて自活対策を中心にした今後の部隊の行動計画を、より綿密に樹てる事の重大さを痛感し大隊副官の中西中尉と協議した。

大隊本部配属の兵科将校は、私と中西中尉と原田少尉の三人であるが、原田少尉は四十才過ぎの予備役将校であり、何事にも消極的で、命じられた事以外は行わない性格なので相談には加わらなかった。

なお、中西中尉も大隊長同様に下士官上がりの将校で、副官として大隊長の命令を着実に実行する努力型であったが、自ら困難を開きしようとする方策に乏しく齒痒く感ずる時があった。

相談の内容は、種々の場合を想定した、自活対策と防衛対策である。

防衛対策に就いては、既に後方部隊になっている現在、急に攻撃を受ける事は無いと思われるが、いづれ米軍が残敵掃討に乗り出す時期が来るものと考えて、島内各所に拠点構築し弾薬も

分散配置しておく事、島内地理地形の調査等、ゲリラ戦の準備、訓練が主なものだった。

自活対策は、野生食料は限界があるので相当規模の農園を開発する事と、さご椰子の樹肉から澱粉を精製、或いは魚を燻製にするなどして非常食を蓄える事であった。

概ね計画案が出来上がったので、大隊長に見せる前に一応原田少尉にも説明した所、彼は一言「計画通り実行出来るかどうか覚束無いね。」と言って去って行った。

私はかっとして「実行可能かどうかは別として、生き抜いて行く為には他にどんな方法があるのか」と怒鳴りつけたかったが、相手が相手だけに堪えた。

しかし暫くして、彼の言葉から私自身不安な気持ちに襲われ、計画の内容をもっと簡単にする必要があると思い始めた。

今は防衛対策を放棄してでも自活に専念する可きかも知れないと考え直し、防衛は海岸線警備だけに止めることに変更して大隊長の承認を得、各中隊にも連絡した。

対策に基づき、大隊本部でも行動を開始したが、ジャングル内の農園造成は困難を極め、生きる為に体力を消耗するという矛盾した作業でもあった。

先ず道具が無い。ジャングル内は高さ数十メートルの巨木が密生しており、それらの巨木の幹の下部は蛇の足のように広がっている。それを鋸刀で刻んでいって倒すのである。

何人もが、何日もかけて一本の樹に苦闘し、それを繰り返して僅かづつの平地を作って行くが何時までたっても壺の底のようで、周囲の巨木のために日の当たる農地には成らない。それでも中断するわけにはいかず、悪戦苦闘の毎日であった。

農園造成の他に、魚捕りにも二名の兵を専従させていた。

魚捕りには手榴弾を使用し、収穫はボラが多かった。使用する手榴弾は一日に一発と限定していたが、たった一発であるので、大漁の日もあるが失敗して収穫の全く無い日もあり、待ち受けている炊事班の者を嘆かせる事がよくあった。

みじめだったのは、支給されたたった一発の手榴弾が不発の時であった。そんな時二名の兵は携行の小銃で数匹の小魚を捕って、申し訳に持ち帰る姿がよく見られた。

ある日、私と指揮班の福島軍曹でカヌーに乗って魚捕りに出掛けた。

手榴弾で魚を捕るには放り込むタイミングが難しい。群れを見つけて、あまり早く放り込むと爆発する前に逃げてしまふし、遅れると危険である。放り込んだ手榴弾が丁度水面近くを泳いでいる群れの所で爆発させるのが一番良い。

幅五メートル程の河の河口付近でボラの群れを発見、静かに近寄って行って、手榴弾を発火させた。そして放り込むタイミングを計っていたが、シューという発火音が聞こえないので手榴弾を耳許に持って行き確かめようとした。

「危ない！」その瞬間、側にいた福島軍曹が私の手から手榴弾を叩き落とした。

「ドカーン」まさに危ない所を救われたが、叩き落とした手榴弾が丁度絶好のタイミングで殆ど水面で爆発し、何十匹のボラが悪く仮死して浮いてしまった。かって無い大漁であった。

不漁もあれば大漁もあるが、いづれにしても魚捕りは従である。やはり主は農園であり、これが計画通り進まないと命取りになる。勿論、将校も下士官も兵達と一緒に奮闘した。夜明けから暗くなるまで、文字通り朝星夜星の毎日であった。

苦勞の甲斐があつて或る程度の耕地が得られ、次々と甘蔗の苗が植え付けられたが、未だ未だ不十分である。

無理な作業のため身体の消耗も甚だしかった。

身体が弱ってくるとマラリヤを発病する。マラリヤを発病するとその高熱の爲更に衰弱する。入院患者が増加し始め、作業に出る人数も減ってきた。

大隊本部四十五名の中、最初の頃は毎日二十五名位が農園に出ていたが、次第に少なくなつて十名程しか作業に出られない日もあった。

そんな状態であるので、野生食物の収集の方も捗々しくなくなってきていた。

当然炊事班の出す兵達の食事の量は激減し、質も悪化したので、兵は飢えに苦しみ始め、何か食える物がないかと常にきよるきよると周囲を見、何でも口に入れる習慣が付いてきた。

病院には常に十名程の患者が入院しており、その内四五名は回復不能の栄養失調状態である。前途に大きな不安を感じざるを得なかった。

もう大隊長の食事さえ充分なことは出来ない。その故か、大隊長も以前のような元気が失せ、身体中に潰瘍を生じて、その手当てに衛生兵が毎日苦勞している。

五月頃、大隊長が一週間程の予定で、各中隊の巡視を言いだした。そして私に随行を命じた。

大隊長、私、それに大隊長付当番兵の来一等兵の三名が、中隊の巡視であるので半袖の略式ながら軍装を固めて出発した。

西南台の出入口の所まで降りてくると、最初に巡視する予定の第一中隊の下士官が出迎えに来ていた。その敬礼を受けて「ご苦勞」と言いながら答礼する大隊長は久しぶりに頼もしい軍人に見えた。道々下士官から第一中隊の状況を聞いていたが、勿論下士官は良い事ばかりしか報告しない。誰々はどうしているか、と次々に将校の名前を挙げて聞いていたが、或る小隊長の様子を聞いた時、下士官は返事を淀んでしまった。「どうした」大隊長の督促に下士官は答えざるを得なかった。その小隊長は最近、拳銃の手入れ中に暴発して自分の膝を打って療養中である旨返事すると、大隊長は急に表情をこわばらした。

「そんな報告は受けていない」一言、言っただけ、それ以後は無言で歩いた。

第一中隊の宿舎はショートランド島の南海岸から西海岸へ回った所の椰子林の中に在る。その椰子林の端に第一中隊の中隊長小栗中尉以下が整列して待っていた。

「かしらー右」中隊長が抜刀して部隊の敬礼を行った。大隊長は中隊長の案内に従って将兵の前を歩いた。某小隊長の前に来た時、中隊長は急に甲高い大声を挙げた。

「某少尉！姿勢が悪い！」怒鳴りながらその小隊長の顔を撲った。悪い事に、小隊長も抜刀していたので、その軍刀が自分の頬を傷付け、血が吹き出してきた。

中隊長の小栗中尉は第一大隊で只一人の士官学校出身の将校で、血気に逸っており、大隊長の前で見栄を張った行為が部下を負傷させる結果となってしまったのである。

大隊長は、先に拳銃暴発の事もあり、完全に機嫌を損ねてしまった。計画では第一中隊で一泊する予定であったが、後日出頭を命じただけで中隊宿舎にも立ち寄らず、次の巡視先第四中隊へ向かった。

なお、此の小栗中尉は敗戦と同時に祖国を伏し拝み、そして拳銃で自ら命を断つてしまった。次の巡視予定の第四中隊は第一中隊の前にあるゴーマイ島と呼ばれる小島に布陣している。

干潮時には歩いて渡れる殆ど陸続きの小島である。急に予定より早く行ったので第四中隊長の織田中尉は单身島の端まで駆けてきて出迎えた。

「大隊長殿、ご苦勞様であります。小林少尉も疲れたでしょう」誠に如才がない。私に迄お世辞を言つて呉れる。

島内は隅々まで掃除が行き届いていて塵一つ無い。

出会う兵は、直立不動の姿勢を取つて、内地の初年兵のようにきびきびした敬礼をする。

中隊長の宿舎に案内されたが、多分本物の大工上がりの兵が苦心して建てたのであろう濡れ縁付きの立派な建物で、西南台の大隊長の宿舎とは大違いである。

さらに驚いた事には、日本茶が出された。

「直ぐに各小隊長も集めてご挨拶かたがたご報告を申し上げますが、お疲れでしょうから、まずご一服して頂きます」恐らく第一中隊から電話連絡で大隊長の機嫌が悪い事は聞いているに違いない。この京都出身の中隊長は、将校行李の底に秘めていた日本茶を振る舞つて大隊長の気分を和らげようと努力しているようである。しかし無理が無く、堂に入ったものである。

「——久し振りだな、日本茶の香りは」大隊長の表情も次第に緩んでくるようであった。

一服の後、中隊の状況の報告を受けたが、報告は簡単なもので、直ぐ雑談に変わっていったが織田中尉は座談も軽妙であり、大隊長はしばしば大声をあげて笑った。

夕食も、西南台では想像すら出来ぬ美食であった。私も随行してきて思わぬ豪勢なお相伴に預かったものである。

その夜私は島に打ち寄せる波音で眠れぬまま、色々と考えた。

陸軍士官学校出身の小栗中尉は、タロキナの戦場では戦友達が死闘しているのに、自分は後方で日々悶々としているのに耐えられず、張り切った所を見せて、ブーゲンビル島の部隊への転属を訴えたつもりであろう。

織田中尉はと言えば、大隊長の覚えを良くしておかなければ、何時将校不足のブーゲンビル島の戦場に追いやられるかも知れぬと考えて努力しているに違い無い。

そして大隊長は、大隊本部で不味い物ばかり食わされているので、中隊廻りを言い出したのであろう。まるで喜劇みたいなものだなと考えている内に眠ってしまった。

翌日出発前に第一小隊長吉川少尉と二人でしばらく話をする機会が持てたので、私はいろいろ聞きたい事を質問した。

「大隊本部は自活対策がうまくゆかず病人が続出しているが、第四中隊の将兵は、見た所非常に元氣そうで羨ましい。こんな小島でどうやって自活しているのか教えてほしい。」と尋ねると、彼は秘密を条件に説明してくれた。

「ブーマイ島は非常に小さい島ではあるが、全島が椰子の木ばかりである点恵まれている。しかし椰子だけに頼っている訳にはいかないので、ショートランド島本島に農園を作っているが大隊本部と違って早くから造成に着手したのでかなりの面積になった。しかし収穫は必ずしも多くは無く、将来の不安が大きい。本来この農園にもっと力を入れる必要があるのだが、それが変な事

の為に、最近兵の作業意欲が鈍ってきて困っている。小林少尉にお見せしたいものがある。」

吉川少尉に案内されて食料倉庫を覗いて驚いた。

倉庫内には食料がびっしりと詰まっている。例の米軍物資だ。話を聞けば米軍のタロキナ進攻時、日本軍に撃沈された輸送船の物資が悉くゴーマイ島の方へ流れて来たが、只海岸に漂着するのを待っているのでは無くカヌーを総動員して海上で拾い集めたいらしい。ショートランド島に流れ着いたものは、どちらかと言えば、ゴーマイ島で拾い切れなかったものであったらしい。

これで謎が解けた感じだが、吉川少尉の心配も尤もだと思った。

食料倉庫を出る時、土産だと言って米軍の携帯口糧を五罐貰ったが、約束通り大隊長には内密にする必要があるので、腰に吊るした図囊の脹らみが気にかかって仕方がなかった。

三番目の巡視先である第二中隊へは、第四中隊の下士官がカヌーで海上を送ってくれた。

第二中隊は正確には中隊では無い。敵機の攻撃を受けて特務艦が沈没した時に多くの兵が戦死した上、ブインで中隊長と二ヶ小隊が南海第四守備隊本隊に転属してしまったので、今は二ヶ小隊しか残っていない。転属した中隊長はタロキナ攻撃に参加して、先日片脚切断の重傷を負ったあの中隊長である。

残った二ヶ小隊の第一小隊は西海岸中央にある梅岬、第二小隊は西海岸北端の竹岬に布陣し、そして梅岬の第一小隊長、中村少尉が中隊長代理をしていた。

中村少尉は私と同期の幹部候補生上がりの将校であるが、如何にも若者らしく、きびきびした態度で大隊長に状況報告をし、その後は大隊長の質問に答える以外べらべらと喋らなかつた。

その夜の食事也不必しも御馳走では無かったが大隊長は珍しく機嫌が良く、第四中隊の時とは反対に、大隊長の方から実戦談などを熱心に語り、中村少尉と私は夜遅くまで聞き役を努めた。

第二中隊の巡視は梅岬だけにして、一旦西南台に引き上げた。

西南台の大隊本部は海岸地帯にある中隊に比べて暗い。そして暗い報告が待っていた。

入院患者が増加し、その内指揮班の兵一人が死んだという報告だった。

私は軍装を解くと直ぐ病舎に出かけて行った。十名程の兵が瘦せ衰えて寝ていたが、その中に「婦人公論」を読めと便りを書いた笠谷上等兵も居て、物も言えず虚ろな目で只天井を見つめている姿は幽鬼のようであり哀れであった。

隣接する医務室の山城軍医中尉に患者の病状を聞きに行った。

医務室に入ると化膿した傷の膿の悪臭が充満していた。診察を受ける兵と治療をうける兵が、並んで順番を待っている。診察を受ける兵は主としてマラリヤ患者であり、治療は潰瘍の手当てが多い。蚊に刺されたような小さな傷でも直ぐに化膿し中々治らない。毎日治療していても次第に化膿した傷口が大きくなり、骨まで露出してくる場合もある。原因は熱帯の気候と栄養失調で抵抗力を失っている為であるから、大隊長以下全員が大なり小なり潰瘍で悩んでいた。私自身も数ヶ所潰瘍ができており、その膿のため下着類が何時もばんばんに固くなっていた。

山城軍医中尉は「困った事だな、入院患者の半数の命はそう長く無い。治療で治る病気で無いだけにどうしようもない。」と嘆いていた。

大隊長に入院患者の状況を報告すると、難しい表情をして予期しない返事が帰ってきた。

「軍医からも聞いた。簡単に入院させるなと軍医を叱っておいた。内地で病人を診ているのと同じような考えでは軍医じゃない。大隊本部四十五人が生きてゆくためには四十五人が働く必要があるのは判り切った事だ。十五人も働かないで四十五人が食ってゆける状況ではない。そんな事になれば四十五人全員が全滅してしまつて任務を全うする事が出来ん。其処を考えるのが軍隊の医者というものだ。何も殺せとは言わぬ。薄情かもしれないが働かせるんだ。小林少尉もよく覚えておけ、指揮官は鬼にならなければならぬ時もある。明日から全員作業に出させろ」

私は、大隊長が戦場にある指揮官として当然の心掛けを言っているものとは素直に受け取る事が出来なかったが、大隊長が経験してきた過去の深刻な戦況の中に於いて全体の為に一部の犠牲

もやむを得ないと判断せざるを得ない場合もあっただろうとも思った。

しかし、少なくとも此の戦場に於いては、状況が更に深刻になった場合全体も安泰である筈が無い。やはり全員お互いに助け合って最後まで生死を共にし度いと考え、大隊長の命令であつても、入院患者を作業場に追いたてるような事は出来なかった。

この時の大隊長の言葉は何時までも私の心に引掛かり、後々の大隊長の言動に対して不安を感ずる事が多かった。

一悶着の後、再び巡視に出発した。

残っていたのはショートランド島南海岸に布陣している第三中隊と野砲中隊であつたが、この二ヶ中隊の巡視は比較的簡単に終わった。第三中隊では、農家出の下士官がりの中隊長が物欲が強く、戦病死者の時計等貴重品を自分の将校行李にためているという悪評を耳にした。最後に回った野砲中隊には、歩兵中隊とは異なつた、おおらかな気風があり驚いた。中隊長は大きな声で大阪の花街の話をして大隊長を笑わせていた。

巡視を終えて痛感したのは、それぞれの中隊にも問題点があるが、むしろ大隊本部が最も悲惨な状況に陥っているという事である。立地の悪さ、農園開発着手の遅れ、中隊と比べて雑勤務が多く、幹部が多い事等不利な条件はあるが、これから先の見込みが立たない程悪くなっている。しばしば病舎を見舞つたが、常に十名余りの患者がいて減らず、むしろ増加する傾向である。遂に笠谷上等兵他二名の兵がばたばたと一週間程の間に死亡した。

私は病人の分をも含めて二人分働く決心をして農園作業に励み、雨の日も休まなかつた。が、連日の疲れの為に私自身ひどいマラリヤに罹ってしまった。私はショートランド島に来てから、既に何回もマラリヤに罹って苦しんだが、その都度四十度近くの高熱を出して有るだけの毛布を頭から被つてがたがたと震えていても、熱が引くと直ぐに働いていた。しかしその時は違つた。熱が上がると同時に意識を失ってしまったのである。体をぶるぶると震わせながら大声を出して

わめき、訳の分からぬうわごとを繰り返していたらしい。数日間は大熱が続いて、その間食事は勿論、薬も口に入れようとしない。当番兵が私を押さえつけてむりやりにキニーネの錠剤を口に押し入れたところ、それを吐き出すと同時に立ち上がり、大声を張り上げながらジャングル内に走り込んだという。

幸い数日間大熱も引き意識も平常に戻ったが、身体の衰弱が酷く、その上食欲が全然無く中々健康が回復しない。当番兵の森本一等兵が、肉親の病人に対するように看護を尽くしてくれた。他の将校が作業に出て、私一人が将校室で寝ている所へ森本一等兵がそっと入って来た。心配のあまり殆ど泣き顔である。

「小林少尉殿、何か食べないと元気になりません」そう言いながら食事の盆を差し出した。見ればお粥が載っている。

「米じゃないか、どうして手に入れたんだ」聞けば私が何も食えないので、食料倉庫へ忍び込み大隊長の非常用として僅か残してあった米袋から抜き取ってきたようである。私は叱る事も出来ず、礼を言つて無理に平らげた。そして、次第に体調をもどして行つた。

この頃、通信兵の山田上等兵が大本営発表の戦況を海軍から聞いて筆記し、毎日持つて来る事になってゐた。丁度ビルマ侵攻の頃で、連日威勢のよい発表ばかりだったが、事實は反対に悲惨な戦いであつたのである。太平洋戦争中何処の戦場も悪戦苦闘し玉砕部隊も多かったが、軍単位の大激戦で、敵の攻撃を受けて苦闘したのはソロモンであり、敵を攻撃して悲惨な戦をしたのがビルマである。後日知つた事であるが、元隊である神野の第百六連隊は、私が出た後に連隊旗を奉じてビルマ戦線に参加、連隊長は勿論、幹部候補生当時親しかつた戦友も殆ど戦死して全滅に近い有様になっている。

このビルマ侵攻程悪評高い戦いは無い。軍司令官の牟田口中将が己の功名心から周囲の反対を押し切つて、補給の検討も不十分なまま無謀な侵攻作戦を計画し、タイからビルマのインパール

迄ミンタミ山系、アラカン山系の峻険を越えて軍を進めたのである。何万の兵は飢えながら貧弱な装備をひっさげて、やっとインパールが見え出来る所に辿り着いた時、英軍の戦車に包囲され当然装備していなければならぬ対戦車火器も無いまま一方的に蹂躪されてしまったのである。そしてこの戦場では、日・英双方共、捕虜の大量虐殺を行っている。

しかし山田上等兵の持つて来る情報は常に調子が良く、羨ましい戦場だと思ったりした。

「小林少尉殿、今日は〇〇まで進撃しました」山田上等兵の声も又明るかった。私も山田上等兵の報告を待ちきれず、「今日はどうだ」と通信室を覗き込む日もあった。

この通信室は色々な情報の源であり、孤立した大隊本部の外界への窓口でもあるので、将兵達が好んで立ち寄る傾向があった。言わば西南台のロビーである。そのうちマサイの部落から来た土民の子供数人がこのロビーに仲間入りして片言の日本語で愛嬌を振りまくようになってきた。特に、十四五才と思われる酋長の息子は、以前の部隊から教えられた日本の歌も歌い、兵達から可愛がられてアイドル的存在になり、暗い本部の空気に仄かな明るさを与えていたようである。

ある日大隊長はこの酋長の息子に案内させて、土民部落を訪問することを思いついた。良い事である。如何様の状況になっても土民達を友好的に保っておく事が必要であろうと思い、大隊長に対して今度も随行させて頂くよう申し出た。

大隊長、私、それに来一等候兵の三人で行く事になったが、出発前になって、どんな服装で行くかに就いて意見が分かれた。私と副官は友好的な姿勢を示すために武器を一切携行せずに平服で行く方が良いと言うのに対し、大隊長は日本軍の威厳を示すため軍装にし、来一等候兵には小銃を携行させるべきだと主張した。何方にも理屈が有る事なので大隊長の意見に従った。

カヌーでマサイ迄行き、酋長の息子に案内をさせて、獣道のような細い道を進んで行ったが、酋長の息子は嬉々として道案内をし、道中、「見よ東海の空開けて——旭日高く輝けば——」と歌い止むことがなかった。部落の入り口にはトーテンポールが立っており、其処に酋長以下数人

の者がにこやかな顔をして出迎えに出ていた。酋長は瘦せてはいるが威厳のある美丈夫である。若い頃ブインで周辺島々土民達の相撲大会があった時優勝したそうである。現在七人の妻と同居しているが、噂では性病で弱っているらしい。

先ず酋長の家に案内されたが、家の中も部落内も実に清潔、清掃されている。

酋長の家に天皇、皇后兩陛下の写真が飾ってあった。

やがて土民独特の歌と踊りが始まり、部落を挙げて歓迎してくれた。踊りが終わってから再び酋長の家に入り歓談したが、全て日本語である。以前の部隊が余程土民宣撫に力を入れていたものと推察された。歓談中次から次へと食物が出された。さご椰子から採った澱粉に甘い椰子の汁を混ぜて巾の広い葉にくるんで蒸した（ちまき）のような物や、パイヤ、パイナップル、ドリアン、オレンジ、マンゴー、その他に名前も知らぬ色々な果物が出てくるので驚きを禁じ得なかった。

大隊長と酋長の歓談中、私と来一等兵はしばらく座を外して部落内を見て回り、再び酋長の家に戻って来た時一寸炊事場を覗いてみた。其処では大勢の土民の女が（ちまき）を作っていたが驚いたことには材料を練っている最中に、その中へ盛んに唾を吐き込んでいる。醗酵させて味を良くさせる秘訣だそうだが、見ている我々は忽ち食欲を失ってしまった。

歓談の場へ戻ると大隊長は盛んに（ちまき）を食っており、如何にも満足気であった。

土民は我々に最大限の歓待をしてくれたが、土民の生活の実情は決して楽なものでは無いようである。土民も又栄養が悪く、潰瘍で苦しみ、衛生状態も良く無いことから平均寿命も三十才位だそうである。特に食料を持たぬ日本軍が占領してからは、海岸沿いにある多くの椰子の芯芽を切り採って枯らしてしまったので、これから先の不安が大きいらしい。

土民部落の歓待を無条件に喜び、安心する訳にはいかなかった。

大隊本部へ帰ってから暫くして、盲腸炎の患者が発生した。山城軍医から直ちに手術するので

立ち合うよう求められた。

手術といっても別に手術室があるわけでもない。患者が枕を並べている病舎の床の一番端で、既に盲腸患者が手術を待って「うーん、うーん」うなっている。軍医は彼の背骨に下半身麻酔の注射を行い、麻酔が効いてくると下腹部を五センチ程切り開き、鉗子で出血を止めておいて、指を腹の中に突っ込んで盲腸部を摘み出した。そして膨れあがった盲腸を切り取り、傷口の縫合を行って手術は終了である。患者は痛みもせず、短時間で、いとも簡単なものであった。軍医は「手術は簡単だが後が怖い、内地で嚴重に滅菌した手術室で行っても化膿して助からぬ者が多いのに、こんな不潔な場所でする手術するとは危険至極な話だ。それでも、先月も第三中隊下士官の盲腸を取ったが元氣になっていたところを見ると全く運だな」と言って笑った。

翌日再び病舎へ見舞いに行くと思者は「夜中に麻酔が切れてきて猛烈に痛みましたが、もう今は大したことはありません」と空元氣を出して言っていた。数日して彼も又運良く全快した。

患者を見舞って病舎を出ようとした丁度その時、悪性のマラリヤで入院していた兵が突然奇声を上げて震えだした。直ぐに軍医が来てしばらく病状を観ていたが、私に小声で「臨終だ」と囁いた。やがてその兵は激しい全身痙攣を起こし、痙攣が止むと同時に息を引き取ってしまった。同室の患者達もその酷い有様を見ていたが、虚ろな眼をしていて、何事も感じないかのようにも窺われた。

ショートランド島にきてから丸一年余、大隊本部で既に七名の兵が死んだが、軍人として敵弾に倒れたのならまだしも、病床に死ぬとは如何にも虚しい事だと嘆息した。

十九年の暮れ近くなって、忘れ去られた戦場だと思っていたところ、再び敵機の銃撃を受けるようになった。

戦況に何らかの変化が生じたものに違い無い。吉か凶か、気にかけるながら避難壕の補修をしていたら情報が入った。タロキナ上陸の米軍が豪州軍と交替したそうである。

米軍はタロキナに上陸したものの、其処を攻撃前進の基地として活用し、占領地域拡大の意図が無かった。そして十九年七月にはサイパン島、八月にテニアン、グアム、を攻略して守備軍を玉碎せしめ、十月にはフィリッピンに上陸、フィリッピン沖で激しい海戦が行われていた。

米軍は逐次戦線を北上させて行く為、既に後方占領地となったソロモンは豪州軍に受け持たせる事になったのである。ところがブーゲンビル島は元来豪州領土であっただけに、日本軍の残存を許さず、掃討作戦を開始したのである。

当時ソロモン各所に散在する各部隊は、飢えと病氣、それに攻撃する都度に全滅を繰り返したタロキナ攻撃戦のために弱体化著しく、九割以上を失った部隊もざらにあった。

豪州軍による掃討戦開始に対処する為にはソロモン第十七軍は急遽、軍の再編成を迫られたのであるが、如何に再編成しようとも掃討軍に対して積極的に反撃出来る兵力装備は無い。軍司令官今村大將は悩みに悩んだ末、自ら筆をとり「第十七軍に要域確保の任務無し。来攻する敵に果敢に反撃し、断じて後退することなくその戦場を死所とすべし」と命令した。人情司令官はついに玉碎を命じたのである。以降、所々で部隊全員戦死の抵抗が行われたのであった。

ショートランド島も軍命令に従って警戒を厳重にしたが、ブーゲンビル島の様に敵の直接攻撃は無く、時々敵機による銃撃を受ける程度である。或いは、ソロモン群島の中でもショートランド島以南が旧英国領だった故かもしれない。

二十年正月飢えと病に苦しんでいる将兵を勇気付ける朗報が入った。

ソロモン各地に散在する部隊の士気を鼓舞する目的で友軍機数機が上空に飛来するらしい。久し振りに翼に日の丸が入った友軍機が現れたら、兵達は歓喜するだろう。

元旦、未だ夜が開けぬ内から海岸に出て、その飛来を待った。しかし待てども待てども、遂に友軍機は現れなかった。

暗い正月ではあったが、この日の為にとって置いた米が少量づつ配られ、兵を喜ばせた。

が、米粒の形はしていても、中身はことごとく虫に食われてしまっている。それでもパイアの葉を焼いて茶の代用にし、茶漬にして食っている兵の心には、故郷の父母と食膳にあった思いが去来しているのであるうと思った。又、入院している戦友のためにお粥を作り「おい、米だぞ米だぞ」と言いながら、食わせようとしている兵達を見るのも辛かった。

敵の掃討戦が開始されたとなると、今まで自活対策に追われて疎かにしていた警備対策を強化しておく必要がある。

先ず島内で最大限の抵抗をする為には、島の地理、地形の調査と中隊間の連絡陸路調査が急務であった。特に今までカヌーによる海上連絡に頼っていた第二中隊梅岬及び竹岬との間の陸路の調査を急がねばならなかった。

私は当番兵を連れて二名で、西南台からジャングルに分け入り真っ直ぐ西北に向かって進み、先ず梅岬に行く事にした。出発の日になって予定していた森本一等兵がマラリヤを発病したので原田少尉付当番兵の戸田一等兵を連れて行くことになった。そして出発に際して通信室に立ち寄り通信兵の山田上等兵に、私が出発したという電話連絡を梅岬の中村少尉にするよう依頼したが山田上等兵の様子はどうもおかしい。聞けば彼もまたマラリヤらしい。「気をつけろよ」と言うのと「小林少尉こそ気をつけて下さい、ジャングルは怖いですよ」と言う。

ジャングルに踏み込み二三分もたたない内に、後ろからばたばたと追い駆けてくる足音がしたので、振り返って見ると酋長の息子だった。手にはバイナッブルを引っ下げている。

「折角持ってきたのに、出掛けるのですか」と不服そうである。

「有り難う、しかし今日は山田上等兵と森本一等兵に食べさせてやって来れ」と言う素直に頷いた。どうも後髪を引かれる思いの出発であった。

最初の数時間はジャングル内に、土民が通った様な微かな道があった。しかし正午頃になってそれこそ千古斧鉞を入れたことの無い密林に迷い込んでしまった。前進するにも縦横に遮る蔭を

切り開いて行かねばならないので時間ばかりかかって何程も進まない。戸田一等兵が汗みどろになつて携行した鍬刀をふるっているが一向捗らない。遂に私も軍刀を引き抜いて奮闘せざるを得なかった。さらに数時間、ジャングルもやや疎林になつてきたと思つたら、今度は膝まで漬かる湿地帯であつた。暗い密林の中で樹々の間を透かして見ても、何処迄行つても同じ湿地帯の様であり、我々が今何処に居るのか、どの方向に進んでいるのかさえ判らない。万一の場合を考えて道々樹に印を刻んで来たが、ふと気が付くと前方にその印がある。ジャングルの湿地帯の中を、ぐるぐると回っていたらしく、大きな不安に襲われた。

「湿地帯があるという事は海岸に近いのと違ひますか」急に、戸田一等兵はそう言つて足下の水を嘗めてゐる。

私は不安の為に動転して気が付かなかつたが、或いはそうかも知れぬと考え水を嘗めてみたが塩分の有無は判然としなかつた。しかし海岸が遠くないものと判断して、一方向へ真っ直ぐ進む努力を続けた。

やがて雨が降り始めた。

泣くに泣けない気持ちで、ただ黙々と湿地帯の中、脚を突っ込んで引き抜き、又突っ込んで引き抜く。

突然目の前が明るくなつてきたように感じて前方を窺うと、マングロープが続いているその先に海が見えた。「海だ」二人は期せずして声を挙げて足を早めた。

雨は上がり、南洋特有の紺碧の海に今夕日が沈もうとしており、その美しさは只事ではなく、荘厳でさえあつた。

しかしその美しさに見惚れている場合ではない。日が暮れるともう動くことはできぬ。付近で適当な場所を探して野宿しなければならないが、一面の湿地帯なので適当な所が無い。それに、炊飯にも暖をとる為にも必要な火が無い。ふと気が付き、携帯していた双眼鏡を分解してレンズ

を外し、夕日から採火しようとしたが夕日は既に沈もうとしており失敗に終わった。拳銃弾の火薬を取り出して針金の摩擦熱で発火させる法もあるが、針金が無い。万事休す。

その夜は食も無く一睡もせずに、ぬかるみの中に立ちつくして夜明けを待つしかなかった。

戸田一等兵は私の身体を気付かって、色々と努力してくれるのが有り難かった。

彼は兵庫県の射撃協会の役員もしていた大学卒業の兵であり、この陸路調査に連れてきて大いに助かったものである。

夜が開けてきたので海岸に出て現在地を判断しようと試みた。海岸といってもマングローブが海中まで張り出しているのので、半身を海中に入れて左右を見ようとしたがよく判らない。

ふとその時、人の声を聞いたような気がした。途端に戸田一等兵は海に飛び込んで数メートル泳いで行き、そして「おーい」と大声で叫んだ。やがて右の方からカヌーが現れたがカヌーの上で日本兵が驚いた顔をしていた。

一晚中立ちつくした場所は、偶然にも第二中隊第一小隊陣地の直ぐ近くであったのである。

速射砲座を中心とする陣地は湿地帯の中の僅かに開けた乾燥地にあり、小隊の宿舎は其処から五百メートル程北の湿地帯から出た所にあった。

直ちに第一小隊長の中村少尉の宿舎に案内されたが、挨拶もそこそこにして三時間程ぐっすりと眠り、やっと人心地が付く有様だった。

中村少尉の話では、彼もまた周辺の偵察を行ったが、陸路で西南台へ行くのはどうしても困難だということである。無駄な苦勞をしたようでもあるが、そういう地形であるとの知識も今後の役に立つと思った。

話を交わしながらふと気が付いたのであるが、中村少尉の宿舎の作りが西南台の我々の宿舎と何処かが違う。そう思ってよく見ると所々に真鍮金具が使用してあったり、ニス塗りの板が使用されている。彼に聞くと、宿舎のある海岸の前に周囲百メートルにも満たない小島があり、戦前

其処に一人の牧師が住んでショートランド島の土民に布教活動を行っていたらしい。その時に建てた教会が今でも廃屋になって残っており、その古建材を使用したそうである。

その島は非常に奇麗だそうで見に行くよう勧められた。

午後、第一小隊の下士官がカヌーに乗り、私と戸田一等兵をその小島へ案内した。

第一小隊前の岸を離れて五十メートル程行った時であった。突然飛行機が低空を飛来してくる爆音に気付いた。

「危ない！」そう叫ぶと同時に三人共海中に飛び込み海底まで潜った。

「ダダダダダ——」敵のグラマン戦闘機がカヌー目掛けて機銃を乱射してきた。海に撃ち込まれた機銃弾が海底まで届かず水中で逆放物線を描いているのが海底の我々によく判った。そして乱射しながら超低空でカヌーの上を通過し、再び折り返して射撃して来る。我々はその折返して来る迄の僅かな間に水面に頭を出して深呼吸をすればよい。何回か繰り返した後、敵機は去って行った。

危ない所だった。中村少尉は宿舎で随分心配したらしい。グラマンが飛び去った後で我々三人が無事な姿で再びカヌーに乗るのを見てホッとしようである。ショートランド島に来てから、同じ様な状況で各中隊にかなりの犠牲者が出ていた。

とにかく助かるには助かったが、その時、後々まで苦になる事をしてしまった。それは軍刀を帯びたまま海中に飛び込んだので鞘に塩分が滲み込んでしまい、刀身に生じた錆がどうにもならなくなってしまうたのである。軍刀は軍人の魂であり、何時までも恥ずかしい思いを続けた。

翌日出発に当たって、中村少尉に梅岬と第一小隊の居る竹岬間の陸路の状況を尋ねると、彼も陸路で行ったことは無いが、海から見ると所々砂浜もあり、比較的通り易いのではないかということであった。

早朝再び密林に分け入った。

密林の中はやはり苦しい。しかし時々樹々が疎らになってきて明るくなったと思うと海岸が見える。少なくとも方角を間違えるような事はなかった。

やがてジャングルが途切れると、其処に、明らかに先住のヨーロッパ人が経営していた広大な椰子林が現れた。梅岬の薄暗さと異なって太陽が燦々と輝いており、その椰子林の果ての海岸近くに第二小隊の宿舎らしいものが見えた。

私と戸田一等兵は、宿舎の方へ向かう前に椰子の実をもぎ取り、その果汁を飲んで渴きを癒したが、その美味だったことは忘れることができない。浜風も心地良く、一度に汗が引いたようであったが、同時に全身がむず痒いような感じだった。

小隊長の宿舎とおぼしい建物の付近まで来て、ふと妙な事に気が付いた。その辺りに建っている建物がいづれも皆三メートル程の床下がある高床式のニッパハウスなのである。立ち止まって「間違ったかな」と首を傾げた時、

「小林少尉！」と大声で呼ばれた。第二小隊長桜井少尉の声だった。

桜井少尉は極めて快活な青年将校である。絶えず少年のような笑顔で種々話をしてくれた。

「景色の良い所でしょう、観光地みたいな所です。陽光は強いけれども椰子の葉影は浜風で涼しく、砂浜にフラダンスを踊る少女でも現れたなら申し分無いのですが、——只、小林少尉も驚いたでしょうが宿舎が皆高床式でしょう、何故だか判りますか？」

「——」

「何が原因かよく判らないが、とにかく長い時間地面近くに居ると全身が痒くなるのです。名も知らぬ草の花粉の故か、目に見えぬ小さな虫の故か、まるで空気に毒があるように全身が痒くて堪らなくなるのです。此処に布陣した当初は困り果てたものでした」

「なるほど、もう我々二人も此処の椰子林に来た瞬間にその毒氣にやられましたよ」

「ハハハハハ」お互いに顔を見合せて笑った。

「景色が良くて健康地だとおもっていると、空氣に毒がある。中々全て良しと言う事は無いものです。兵達の健康状態はまあまあです。ご覧のように大きな椰子林の中に居ますから食い物が全く無くなって飢え死にするようなことは無いが椰子だけでは体力が保てません。それに潰瘍とマラリヤが酷いのは何処の隊とも同じです。死者は此処に布陣してから三人出ました。これは他の中隊と比べて少ないかもしれませんが、一人はマラリヤで、一人は機銃掃射、そしてもう一人は見た事も無い魚を食って、可愛そうに全身が麻痺して死にました——この辺は妙な所で魚も果物も良く判ったものしか食べません。ジャングルの中で何とも言えぬ香りを漂わせている果物を見つけて、ふらふらと引き寄せられ其の木の下へ行っただけで氣が変になるものもあります」

この快活な小隊長も部下の死を語る時は悲しげだった。

邪氣の無い笑顔で語っている彼も、此の一年半余り随分苦勞してきたことだろう。

高床式の小隊長宿舍で夜遅くなるまで話し合った。僕は梅岬で銃撃に遭い軍刀を海水に漬けた事を言うと、彼は将校行李から七十センチ位の白鞘の小刀を取り出し、

「小林少尉のようにジャングルに入ったりカヌーでよく出張する人は、重い軍刀よりもこの方が良いのと違いますか、進呈します」と言う。一応好意を謝して辞退したが、頂くことになった。

ところが、翌朝出発する間に頂いた小刀の鞘を払って直振りをしていたところ、柄の目釘が折れて刀身が飛び、足にぐさりと突き刺さってしまった。自分自ら負った傷であるが、桜井少尉は悪い事をしたように恐縮し切っていて、こちらが申し訳なかった。

足に包帯を巻き、桜井少尉が用意してくれたカヌーに乗って帰ることになったが、
「傷を大事にしてください。直ったら是非知らせてください」心配そうな表情で言ったが直ぐに持ち前の明るい顔をして我々を見送ってくれた。

あの、人の心を和やかにする笑顔を持った彼も、ブーゲンビル島に転進した直後病死したと聞いている。

大隊本部に帰隊後陸路調査による地形図を作成したが、何しろ広漠たるジャングルの図を描くのであるから非常に苦勞したものである。

帰隊後間もなく山田上等兵が入院し、やがて昏睡状態に陥ってしまった。大隊長付当番兵当時に大隊長に憎まれて配属替えになった魚住兵長もマラリヤの後衰弱がひどく、栄養失調の爲腹を膨らませて回復せずに半年あまりも入院したままである。他にも数名回復の見込みの無い患者がいて、悲惨な状況である。

中隊の方でも、大隊本部ほど酷くはないが、次第に病人が増加しつつあるようであり、とくに第一中隊の状況が急激に悪化してきている。先に拳銃暴発のため負傷した小隊長も傷が化膿し、衰弱がひどくて絶望的だと言う。

大隊本部の將校、下士官も体力が目立って低下してきている。特に原田少尉が一番弱ってきたようであった。彼は四十才をこえた年齢であり、内地の職業は裁判所の書記をしていたので労働で鍛えた身体を持っていない。ところがその原田少尉の行動が著しく変化してきた。彼は朝食を終えると全身の潰瘍の治療を受け、その後直ちに農園作業に出掛けて夕方遅くまで働いている。なぜか身体が弱ってくるに従って無理にも働こうとしているように見えた。平素から消極的な人だけに気味悪くも感じた。

軍医から連絡があり病舎に駆けつけると、山田通信兵が息を引き取ったところだった。安らかな死に顔であった。

軍医が僕にメスを差し出して、

「小林少尉は山田上等兵を可愛がっていたんだから、君の手で彼の小指を切り取って、その遺骨を国に帰れる日があったら故郷に届けてやるようにしてあげたら彼も喜ぶに違いない」と言う。

軍医もまた、あの西南台ロビーの主人公で、思った事を何でもざっくばらんに言う山田上等兵が好きだったのだろうと感じた。

故国に帰る日が有るとは思えないが、若しその日があるならば是非共届けようと思ったが、遺体にメスを入れる勇氣は無いので軍医に依頼した。

山田上等兵の死後数日たって又一人の兵が病死した。その兵は死ぬ直前まで意識がはっきりしており、「敵と戦う前に死ぬのは残念です」と云ったそうである。

西南台はまさに地獄の様相を呈しつつあった。

炊事班の給食は生命をつなぐには不十分であり、各人が口に入れられる物を見付け出して採取する能力を持っている者だけが生き残ってゆくようであった。栄養失調症のため腹を突き出して心細げに歩いているが、目だけは食物を求めてきょろきょろしている。歩いている時でも、作業している時であっても、蜥蜴、蜘蛛、やどかり、彼等の弱った身体で捕らえることの出来る物は見つけ次第何でも口に放り込んでいた。

私自身も例外ではなかった。

軍務の時以外は常に裸足で、身には虱の卵で真っ白になったばろを纏い、木の芽や柔らかい草を採って食い、昆虫類は逃さずに捕らえて食った。海岸でやどかりを見つけると、殻ごと嚙み砕いて食う哀れな将校になっていた。

やどかりと云えば一度大物に恵まれた事がある。野砲中隊に出張して兵の宿舎に一泊した際、夜中小用に起き土間を見て思わず目をこすった。宿舎の棚に並べてある飯盒の一つが土間に落ちその飯盒が動いている。拾って見ると巨大に成長したやどかりが恰好の家を見つけたとばかりに飯盒を背にして歩いていたのであった。勿論翌朝の食膳に乗ったが、とても美味なものだった。

その他、希にはあるが、兵達も思わぬ収穫を獲て来る事があった。椰子の木にへばり付いていた一メートル半程の大蜥蜴、小川で見つけた腕位の太さの大鰻、二メートル程の大蛇、或いはジャングルの巨木を倒した時に失神していた猿（なまけもの）、マングロープの中に潜んでいた伊勢海老など。この伊勢海老を見つけたのは将校炊事兵の井田上等兵だったが、これで大隊長に

喜んで貰えるものと思ひ素手で捕まえたものだから手のひらを血だらけにして帰ってきた。

尚その頃、海岸の堅い珊瑚礁の碎けた砂浜を裸足で歩くものだから、足の裏の皮膚内に珊瑚礁の屑がめり込んでしまつて鉾を打った靴のようになっていた。

大多數の兵は蚤刀を片手に食を漁つたが、身体の多少元氣な者は、食を陸上よりも海中に求めていた。

砂浜から百メートル程沖合の環礁の先端は急に水深が深くなっているが、その辺りに大きな貝が生息している。その貝柱が非常に美味であり、しかも握りこぶし位の大きさがあつて飢えた兵にとつては堪らない食い物なのである。が、これ採取するのは容易ではない。海中を潜つて、大きな貝を見つけても不用意に貝中に手を入れると、貝の蓋が閉じ、その力で腕さえ折れてしまふ事がある。蓋が閉じる迄のほんの僅かな間に手にした小刀で貝柱を切り取つてしまわなければならなかった。それよりも環礁内百メートル程の往復が極めて危険である。環礁内の水深は浅く五十センチ位であるが、若し往復の途中敵機が現れたならば逃げ隠れが困難である。貝柱を採取出来る兵は限られており、兵器係木田伍長はその特技を持つていて羨まられていた。

他の兵は環礁内で小銃を使って魚を捕つていたが、これも必ずしも簡単でない。魚は弾が命中しなくても、身辺に弾着があるとショックで仮死するのであるが、水中で光が屈折する為狙い方が難しい。それにやはり敵機の不安が付きまとう。

二十年の四月頃だったが、私は西南台の出入り口から一キロ程東にある小さな農園に兵を連れて行つていた。其処は土民の果物農園の跡地で、海をよく見える豊かな土地だった。

その付近の海岸は河口がある関係から絶好の漁場であり、作業の休憩時間を利用して大隊本部の兵が野砲中隊の兵と入り雜じつて魚捕りに夢中になっていた。

その時突然敵機があらわれた。

超低空で飛来して頭上に来る迄爆音が聞こえず、突然、環礁内の兵達に機銃弾を浴びてきた

かなり沖に出て魚を捕っていた者は逃げ帰ることもできず、その場で身を屈めて難を避けようとし、岸近くに居た兵は必死になって海岸に駆け戻ろうとした。

その駆け出した兵達に対して機銃弾が集中し、数名の兵がばたばたと倒れ海水を血で染めた。大隊本部の兵一名は幸いにも軽傷で済んだが、野砲中隊の兵二名が死傷した。死んだ兵は腹部に銃弾を受け、腸が体外にはみ出した無残な即死であった。

私は農園からその状況を見ていて血の気が失せる感じだった。

死傷者がばたばたと倒れた情景、それに、銃撃音に驚いた真っ赤な色、真っ青の色をした無数の鸚哥が、何時までもぎゃーぎゃーと鳴き続けていたその色、声が今でも目、耳に鮮明に残っている。

日がたつにつれて、部隊は飢えた亡者の群れになりつつあった。

ブーゲンビル島の南海第四守備隊本隊の方も同様らしい。気が狂ってしまった者もいた。

元隊の第百六連隊で編成されて来た機関銃中隊の森居中隊長が突然軍刀を引き抜いて、同僚の将校に切りかかったので、射殺されたと云う噂もあった。

どうしたら良いのか。

何時まで生き永らえる事が出来るものだろうか。

夜になると、内地から持ってきた家族の写真を密かに取り出して眺め入る事がよくあった。

学校を卒業、入営直前に記念のために撮った家族全員の写真には、懐かしい父、母、妹それに私が、今日の事等夢にも考えられない顔をして写っている。

私は若し畳の上で死ぬるものなら今でも死にたいとよく思った。私が軍人精神を教えた兵達が餓鬼になっても祖国の為に戦う日を持っているのに、私自身がそんな思いにとられるのは卑怯だとは考えたが、如何とも仕方がなかった。

その頃一時期、大隊長は部下に対して怒鳴るような事は少なくなっていた。同郷の来当番兵が

誠心誠意で大隊長に尽くしているのも其の理由の一つであった。しかしその目には常に意地悪い光が宿っており、何時無体な事を言い出すか判らぬ不安があり、ブーゲンビル島本隊の森居中尉の例もあって恐怖さえ感じていた。

ある日急に主計将校の山本少尉の姿が消えてしまった。

大隊長と口論したらしい。

元来軍隊の高級部隊長は軍医と主計を、それぞれ思惑があって大事にする傾向がある。しかし山本少尉の場合、大隊長の我儘を満たす特別な配慮が出来る状況にない。主計将校でありながら大隊長の為にも部隊の為にも何等役に立っていないではないか、と云う事が大隊長の不満でありあからさまに山本少尉を詰って口論になったらしい。

副官の話によると、山本少尉は即日マサイ近くの空き小屋に単独謹慎を命じられたそうだが、その後の噂さえも聞いたことが無い。

二十年の春、春と云っても年中四季の変化の無い島ではあるが、その頃ブーゲンビル島では、全島の部隊の大移動が開始されたと云う情報が入ってきた。

各地に散在する部隊が、個々に豪州軍の掃討を受けて全滅するよりも、一個所に集合して抵抗することになり、ブイン近くの八重山を中心とした地域に集結し始めているらしい。

そしてショートランド島の我々も、いづれ転進命令が来るのではないかと危惧された。

現在の状態下での転進は致命的である。多くの病人を抱え携行する食料も無いので多大の犠牲を覚悟しなければならないからである。

が、六月、遂に転進命令を受け、俄に慌ただしくなった。

各中隊長が西南台に招集され、転進のスケジュール準備作業等に就いて打ち合わされた。転進の為の舟艇は連隊本部の方で準備されるが、舟艇の数が極めて少ないので、可能な限り携行する装備類を減らすように要求されている。

いずれ玉碎する運命にある転進なので、陣中日誌等重要書類をはじめ大隊本部事務関係の書類
備品などは総て廃却し、前部隊以来豊富にある弾薬も、その大部分を密林内に穴を掘って秘匿し
ておいた。

只、ブーゲンビル島転進後、深い山中に入ることが予想され、食料獲得には現在よりも猶一層
困難になる心配が大きいので、転進迄に出来るだけ多くのコブラ（椰子の果肉）を収集する事と
なった。

そうした時期、中西中尉、原田少尉、私の三人が分担し、転進に関する細部打ち合わせのため
各中隊へ出張した。

私はマサイの野砲中隊へ出向いて行ったが、その日は南の島では珍しい豪雨であった。ずぶ濡
れになりながら、これから先に猶続く艱難を思いわずらった。転進即決死行であるが、それまで
の間死ぬよりもお辛い日々であろうと心中暗然としていた。

道中ふと思いついて、かなり回り道になるが、主計の山本少尉が謹慎していると聞いた小屋に
立ち寄る事にした。が、確かに此処だと思われる場所には小屋が潰された後の廃木や屋根に使わ
れた椰子の葉等が無残に散らかっているだけであった。

帰隊すると副官や原田少尉は未だ帰っていない。

そして、軍医が青ざめた顔で私の側に来て云った。

「魚住兵長と杉本一等兵が——」

「死んだのか！」私は彼等が移動の手足纏いになることを恐れて自殺したものだと直感し、大声で
聞いた。しかし軍医は悲痛な表情で顔を横に振って、二人は歩んこともあいの身が、突然消えてしまった。と云った。

二人は歩んこともあいの身が、突然消えてしまった。

そのあはぶびえていた。

そのあはぶびえていた。

そのあはぶびえていた。

